

ラテンアメリカ研究図書館の リソース・シェアリング活動と日本の課題

村井友子

●はじめに

米国には、テキサス大学オースティン校（以下、UTオースティン）を筆頭に、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（以下、UCLA）、ピッツバーク大学、ニューメキシコ大学、ハーバード大学、プリンストン大学、フロリダ国際大学、マイアミ大学、バンダービルト大学など、特色ある大規模なラテンアメリカ研究コレクションを所蔵する大学が多数存在し、その蔵書構築はラテンアメリカ地域を専門とするサブジェクト・ライブライアンによって担われている。これらの大学の研究図書館は、OCLC WorldCat等を通して世界各国の図書館に蔵書の貸出・文献複写サービスを提供し、コレクションの電子化やリポジトリ構築などを積極的に行うことによつて、世界中の研究者に貴重な学術

情報資源を提供している。

このような高い知的貢献を支えているのは、米国の図書館界で広く共有されているリソース・シェアリング（図書館情報資源の共有）の理念と実践である。

本稿では、米国のラテンアメリカ研究図書館が実践するリソース・シェアリングの事例を紹介しながら、その意義と日本の研究図書館が学ぶべき点を検討する。

●コンソーシアム活動

米国の研究図書館の多くは、組織を超えたコンソーシアム活動に深く関与しており、そのなかで、リソース・シェアリングを目的としたコンソーシアム活動はサブジェクト・ライブライアンの重要な任務のひとつに位置づけられている。

例えば、研究図書館センター

（以下、CRL）は、人文社会科学系の研究に必要な不可欠な一次資料の保存と共同利用の促進という

ミッションのもとで一九四九年に設立された北米最古の研究図書館コンソーシアムであり、現在、米国・カナダの大学図書館を中心に二七六館が加盟している（CRLのホームページ：<http://www.crl.edu>）。

CRLには、東南アジア研究、南アジア研究、アフリカ研究、中東研究、ラテンアメリカ研究に関する地域研究図書館の下部コンソーシアムが組織されており、ラテンアメリカ研究については、LAMMP（以前はラテンアメリカ・マイクロフォーム・プロジェクトとして知られていたが、現在はLAMMPを正式名称とする。）と、ラテンアメリカニスト・リサーチ・リソース・プロジェクト

（以下、LARRP）の二つがある。双方ともラテンアメリカ研究に資する一次情報の資源共有化を目的としたコンソーシアムである。以下、LAMMPが手がけたブラジル研究のための資源共有化プロジェクトの実践事例を紹介する。

●ブラジル政府逐次刊行物デジタル化プロジェクト

LAMMPはラテンアメリカ地域の新聞、雑誌、政府刊行物などのマイクロフォーム保存と共同利用を目的として一九七五年に結成されたコンソーシアムである。LAMMPのマイクロ化プロジェクトは、加盟館の所蔵資料のなかで、貴重だが、膨大で、現物保存のままでは散逸、劣化の恐れがある研究一次資料をマイクロ化した後、マスターのネガフィルムを所蔵館、ポジフィルムをCRLのシカゴ本部で保存し、会員の依頼に応じ、サービスコピーの貸与や販売を行うという方式で実施されてきた。

ブラジル政府逐次刊行物デジタル化プロジェクトは、LAMMPが一九七〇年代にブラジルの国立図書館と共同で実施したブラジル連邦政府と州政府の刊行物のマイクロ化プロジェクトの成果物である

マイクロフィルムや、米国議会図書館（LC）が所蔵するブラジル各省庁の刊行物のマイクロフィルムなどをデジタル化し、インターネット上でオープンアクセスのデジタルアーカイブとして公開するプロジェクトであった。

メロン財団の助成金により実現したこの壮大なプロジェクトは一九九四年に始まり二〇〇〇年に完了した。一八二一年、すなわちブラジルの独立の頃から一九九三年まで約一七〇年間におよび長い歴史のなかで刊行された約七〇万ページに及ぶ政府刊行物の画像がCRLのサーバー上で提供され、フルテキスト検索が可能で、ブラジル研究の貴重なリソースとなっている。このプロジェクトには、ノートルダム大学、コーネル大学、UTオースティンなど、複数の大学のラテンアメリカ研究やイペロアメリカ研究を専門とするライブラリアンやピブリオグラファーが委員として関わった（参考文献①）。

膨大な一次資料の媒体変換とデジタルアーカイブの構築には莫大な費用、人的資源、および専門技術が必要になるため、図書館が単独で実現するには、高いハードル

が存在する。米国の研究図書館は、サブジェクト・ライブラリアン達のコンソーシアム活動により、図書館のコレクションを社会の公共財と位置付け、その保存と公開方法を検討する組織的な基盤を持ち、プロジェクトの資金源獲得のためにファンドレイジング活動も活発に行っている。

●LANIC

次に、ウェブ上で世界最大のラテンアメリカ研究リソースガイドを提供するラテンアメリカン・ネットワーク情報センター（以下、LANIC）によるリソース・シェアリングの実践事例をみていきたい（LANICのホームページ：<http://lanic.utexas.edu/>）。LANICは、UTオースティンのロサノ・ロング・ラテンアメリカ研究所（LIAS）と同大学の世界屈指のラテンアメリカ研究図書館であるベンソン・ラテンアメリカ・コレクション（以下、ベンソン・コレクション）のイニシアチブにより一九九二年にインターネット上で情報発信を開始した。ラテンアメリカに関する膨大なコンテンツが提供されているが、パスワードがわかりやすく整

理されているため、必要な情報へのアクセスが容易にできる。本稿ではこのなかから、社会科学分野の二つのサイトを紹介する。

●ラテンアメリカ灰色文献リポジトリ

ラテンアメリカン・オープン・アーカイブズ・プロジェクト（LAOAP）はラテンアメリカ諸国で出版された社会科学分野の灰色文献へのアクセスを支援するリポジトリであり、先述の研究図書館コンソーシアムLARRPとLANICの共同プロジェクトとして二〇〇二年に米国教育省の助成金とUCLA図書館の技術協力を得て発足した（LAOAPのサイト：<http://lanic.utexas.edu/project/laop/>）。

チリのラテンアメリカ社会科学大学院大学（FLACSO）、グアテマラのメソアメリカ地域研究センター（CIRMA）、アルゼンチンのトルクアト・ディ・テラ大学など、ラテンアメリカ諸国の一三の研究機関・NGO等がパートナーとなって、自機関のワーキングペーパー、プレプリント、リサーチペーパーなど、商業ベースでは入手不可能な各種報告

書のメタデータとコンテンツをLAOAPに提供している。

LAOAP設立の背景には、ラテンアメリカ諸国で、研究機関やNGOがウェブサイトで公開、または非売品として刊行する各種レポート類が急増する一方、ウェブサイトの脆弱性や通常の検索エンジンでは収集不可能なディープウェブの問題などにより、図書館で収集されず、学術コミュニティにおいても認知されなまま消えていくという問題があった。この問題を解決し、社会科学分野で重要度の高い灰色文献を迅速かつ包括的に収集・提供することが、この共同リポジトリの構築の趣旨であった。

LAOAPは、OAI-PMHという国際的に標準化されたメタデータの交換プロトコルに対応しており、異なるサービスプロバイダー間のデータ共有が容易に出来る。LANICのサーバー上に構築された信頼性の高いリポジトリへの登録は、ラテンアメリカ諸国の研究所とって、研究成果の安定したアーカイビングと国際的認知度の向上というメリットがある。また、国際標準プロトコルに対応したりリポジトリへの参加は、

OAISter&Google Scholarなど、汎用性の高いサービスにハーベスティングされ、インターネット上の学術情報資源として広く活用される可能性にもつながっていく。

●ウェブアーカイビングによる政府情報の収集

ラテンアメリカン政府文書アーカイブ（LAGDA）は、ラテンアメリカ一八カ国の各省庁が公開した文書や各国の大統領演説を網羅的に提供するポータルサイトで、コンテンツのベースとなっているのは、ラテンアメリカ諸国の三〇〇以上の政府関係機関のウェブ・アーカイブ・コレクションである。LANICがインターネット・アーカイブ（IA）と共同で、特定のサブジェクトに関するウェブ・アーカイブ・サービス Archive It のパイロット・プロジェクトとして二〇〇五年に立ち上げた。

今日までに四四〇〇以上のURL、文書、データ、音声、ビデオなどが、オリジナルの媒体のままアーカイビングされている。オープンアーカイブなので、誰でもLAGDAを通じ、既にインターネット上から消えてしまったラテ

ンアメリカ諸国のウェブページとそこから抽出した各種政府情報にアクセスすることが出来る。アクセス方法は、LANIC作成のメタデータをベースとしたテキスト検索と国、機関ごとにリスト化されたリンクのブラウジングの二種類がある。

例えば、二〇一三年三月に逝去した元ベネズエラ大統領ウーゴ・チャベスの演説やラジオプログラム「アロー・プレジデンテ」の録音を聴くことができ、テキスト検索で「Hugo Chavez」をキーワードに検索すると実に三二四八件の多様な媒体のコンテンツがヒットする（二〇一四年二月二日アクセス）。

LAGDA構築には次の前史がある。ペンソン・コレクションでは一九九〇年代まで冊子体の政府刊行物を網羅的に収集していた。

二〇〇〇年代に入り、ポーンデジタルの政府文書がインターネット上で提供され始めると、目録の書誌レコードにURL情報を記載し、インターネット上のリソースにリンクさせるとともに、コンテンツをダウンロードして自館のレポジトリで保存するようになった。しかし、ウェブページの頻繁

な改編によりリンク切れが多発し、政府刊行物の網羅的な収集が難しくなったため、新たな解決策として考案されたのが年四回のウェブアーカイビングであった。網羅的な研究情報の収集と提供をミッションに掲げる研究図書館が、先進的な手法でそのミッション達成を迫及した事例といえよう（参考文献②）。

●おわりに

以上のように米国の研究図書館は、研究情報のリソース・シェアリングと情報発信を多彩な連携協力により実現してきた。これに対し、図書館間の連携という点で米国の後塵を拝す日本の研究図書館の課題は山積している。例えば、日本には特定の地域や主題を専門とするサブジェクト・ライブラリアンの数が少なく、図書館間で分担収集・保存・共同利用について話し合える公式の場が不足している。そのため、多くの大学図書館や研究図書館が、スペース問題と予算制約のため、海外の新聞など、貴重な研究資料を廃棄せざるを得ない状況に立たされている。社会の成り立ちが異なる日米の単純比較は意味をなさないが、組

織の壁を越え、図書館間で研究資源のリソース・シェアリングについて情報共有し、共通の関心事項として検討する場を設けることは喫緊の課題であろう。同時に、インターネット上での学術情報資源の共有が進むなか、日本の研究図書館がリソース・シェアリングのグローバルな動きに積極的に参加していくことが今後益々重要となろう。

（むらい、ともこ）アジア経済研究所 図書館

《参考文献》

- ①Scott Van Jacob, CRL/LAMP Brazilian Government Serials Digitization Project: Final Report December 2001 (URL: <http://www.crl.edu/sites/default/files/attachments/pages/FinalReport.pdf> 最終アクセス：二〇一四年一月一〇日)
- ②Kent Norworthy, Long-Term preservation for Fragile Web Content: LANIC's WEB Archiving Program (URL: <http://lanic.utexas.edu/project/etext/llilas/portal/portal099/lanic.pdf> 最終アクセス：二〇一四年一月一〇日)